研究論文

ブログにみる松島の風景と空間の意味の関係

Relationship between Meaning and Landscape in Matsushima from Blog

伊藤　弘*
Hiromu ITO

要　旨：古来より名勝として知られており，空間への一定の意味づけがなされて鑑賞されていると考えられる宮城県松島が，現在どのように捉えられているかを，利用者による空間への意味づけが読み取りやすいと考えられるブログから把握し，空間への意味づけと捉え方の関係を明らかにした。その結果，居住地を指標とした対象地への親近性の強弱によって視点場が異なり，それに伴って対象空間の捉え方が異なっていた。親近性の強い県内来訪者は視点場から対象空間を俯瞰する傾向にある一方，親近性の弱い県外来訪者は船上から対象空間を眺める傾向にあった。本研究での空間への意味づけが行われると，個別要素ではなく松島全体が鑑賞されるようになっていた。

はじめに

わが国日本において，古来より沿岸域は名勝地であることが多かった。近代以降，その対象は山岳へと移行したものの，現在でも名勝地である沿岸域は多く，自然公園においても海域公園として指定されている箇所も多い。風景を鑑賞する風景地は，古来より詠まれている和歌などと関連づけて捉え，先行イメージに結びつきやすい「意味の風景（信仰や和歌など言語や観念に近い）」と見たままを捉える「視覚の風景（視覚像に近い）」から成立するとされている（中村，1982；篠原，1982）。意味の風景を先にイメージしつつ対象空間を眺める場合と，意味の風景を知らないもしくは意識しないで対象空間を眺める場合では捉え方が異なることが考えられる。本研究では，ある主体（利用者）が，前述のように実際の空間に対して意味の風景を生成させる行為を空間の意味づけとする。空間の意味づけとともに実際の空間を眺めることが風景体験であり，古来よりある名勝地や風景地における利用者の鑑賞の仕方を考えるに当たっては，それぞれを無視することはできず，空間の意味づけの眺めへの影響を把握する必要がある。名勝地や風景地においては，まずはその姿を利用者にどのように体験してもらうかという風景体験が検討されるべきであるが，必ずしもその検討を踏まえた風景地整備がなされているとはいいがたい（黒田ら，2002）。

また，利用者の対象空間への身近さ（親近性）の程度によっても，起こりうる風景体験は異なると考えられる。この差異は，対象空間に対する利用者の理解の差異に結びつくと考えられ，地域から情報を提供することによって埋めることができると考えられる。すなわち，親近性の低い利用者は，提供された情報に基づいた風景体験を足掛かりとして，親近性の高い利用者と同じ観光体験を享受し対象空間の理解を深め，景観に対する価値を向上させることができる。一方，親近性の高い利用者に対しても提供する情報によっては，対象空間の理解をより深めさせ，景観に対する価値をより向上させることができると思われる。名勝地や風景地においては，その景観に対する価値の向上によって，景観の継続性が担保されていく。したがって，対象空間に関して先行するイメージの実際の眺めへの影

*いとう　ひろむ・筑波大学大学院人間総合科学研究科
キーワード：名勝，意味づけ，ブログ，風景

響を考慮してどういった情報を提供していくかを検討するためにも，空間の意味づけの影響を把握する必要がある。その際，まずは前述のとおりにそもそも風景体験が異なると思われ、比較的簡単に選別しやすい対象空間への親近性によって提供の仕方を同じくするかどうかを検討する必要がある。

従来は，来訪者がどのように空間を捉えてきたかを把握する方法として，来訪者に対するアンケートの実施や紀行文の読み取り，ハンディ GPS を活用した利用動態調査やレンズ付きフィルムを利用した写真撮影調査からの考察などが行われてきた。近年，情報技術の発達により個人が日常で感じたことを情報発信するいわゆるソーシャルメディアと言われているブログやツイッターなどが広く作成され，公開されている。ツイッターはユーザーが多く，その場で短い文章で作成されるため直感的・即地的である一方，ブログは，ツイッターのユーザーほど記事件数は多くない反面，ブログ作成者（作成者）が体験した空間を思い出しながら各自の言葉に置き換える過程を経て作成されており，作成者がすでに有している空間のイメージが，空間の描写に反映されている（空間の意味づけを行っている）と考えられる。被験者属性や来訪者（年齢層や居住地等）におけるブログ作成者の割合や更新頻度などを把握することは困難であるものの，ブログからは被験者を限定することなく，日常から非日常まで原則被験者の感性に基づいて率直に描かれた情報を得ることができる。したがって，先述した聞き手への回答を前提とした，いわば「身構えた」状態のアンケートや言語化することに秀でている限られた作成者による紀行文に比べて広く空間の意味とその捉え方の関係をみるのに適している。

本研究は，前述したブログの性格を踏まえ，現在の名勝地・宮城県松島において多く用いられる紋切り型の言説を空間の意味づけとし，その有無による空間の捉え方の差異を，情報源としてブログから把握し，今後の風景地整備のあり方を考察することを目的とする。利用者は対象空間への親近性の程度によって対象空間を眺める頻度が異なるため，実際の眺めとそれへの空間の意味づけの影響は異なる。そしてその結果，対象空間の捉え方が異なると考えられる（黒田ら，2002）。したがって，利用者の対象空間への親近性に応じて空間の捉え方がどう異なるのかも，実際に体験される眺めと空間の意味づけとの関係から把握する。

1. 研究の方法

1.1　調査対象

対象地は宮城県松島湾である（図1）。松島湾は，近世より日本三景の一つとして名勝地であり，「松尾芭蕉がその美しさに絶句して『ああ松島や松島や』と詠んだ」と言われることが多い（実際は狂言師　田原坊が詠んだとも言われている）。また，大正時代より観光地として整備され続けており，一定の広さをもった自然風景地として評価され，土地を取得せずに公園指定された国立公園制度以前の地域制公園としても評価される地域である。「松島」というと，松島湾およびその周辺の寺社仏閣（瑞巌寺など）一体が捉えられているが，本研究では，空間の捉え方と空間の意味づけの関係を把握するため，作成者が捉える対象空間に変動が生じないよう，松島湾を調査対象とした。具体的には，松島湾を視対象としたブログ記事を対象としており，その作成者の場所（視点場）は松島湾周辺となる。

1.2　調査方法

直近1年間（2010年1月1日～2010年12月31日）にブログにて掲載された松島の多島海景観に関する記述を抜き出し，捉えられた空間を「どこから（視点場）」「何を（視対象）」「どのように眺めたか（景観種類）」を指標として把握した。視点場および視対象は，松島湾を描写する記事中に出現する文言から把握した。ただし，視点場の描写に関しては，具体的に（複数の視点場からの眺めをまとめて記述したと思われる記事など）どこからの眺めを記述したのか不明な記事もあり，

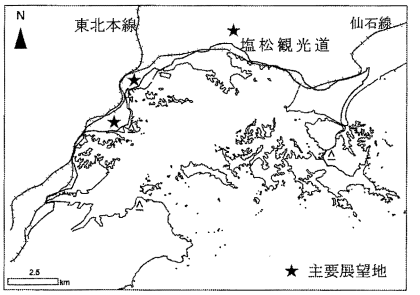

図1　対象地　松島

それは「不特定」とした。景観種類は，視点場と視対象の位置関係から水平景（視点場と視対象の標高がほぼ同じ），俯瞰景（視点場の標高が視対象よりも高い），シークエンス景（「島が次から次へと……」など移りゆく描写），場の景観（視点場を特定せずにイメージに近い描写）に分類した。検索エンジンは既往研究を参考に，Yahoo!ブログ検索を用い「松島」にて検索した。対象地において何らかの紹介や感想を述べている記事を対象とし，単に「松島に来ました」など自身の行動を表すだけの表現をしている記事は対象外とした。

記事からは，来訪者の居住地と対象空間の意味づけを把握した。来訪者と松島の親近性を測る指標として居住地を指標とし，地域住民〔松島湾に接している市町（松島町・東松島市・塩竈市・七ケ浜町）に住んでいる住民〕・県内来訪者（宮城県内に住んでいる来訪者）・県外来訪者（宮城県以外に住んでいる来訪者）に区分した。また「三景」「芭蕉」「ああ松島や……」と一般に松島とともに多く用いられている言説が表現されている記事を，空間の意味づけを行なっているものとし，その文言の出現頻度を把握した。

2. 来訪者と空間の意味づけ

2.1 来訪者の居住地（図2）

今回調査対象となった利用者数は427名，記事は全部で599件であった。居住地別にみると，地域住民は12名，県内来訪者は97名，県外来訪者は318名であった。それぞれ作成した記事件数は地域住民26件，県内来訪者147件，県外来訪者426件と，県外来訪者が圧倒的に多く，地域住民は非常に少ない。

2.2 空間の意味づけ（図2，3）

空間の意味づけを施した利用者は427名中195名，記事件数は599件中257件とほぼ半数の利用者が，4割強の記事で空間の意味づけを行っていた。居住地別にみると，空間の意味づけを行った地域住民は2名（記事件数11件），県内来訪者は29名（記事件数37件），県外来訪者は164名（記事件数209件）となっている。対象空間への親近性が高くなるほど空間の意味づけが行われず，一般的なイメージに囚われずに，各自の感性に基づいて空間を捉える傾向にあるといえる。

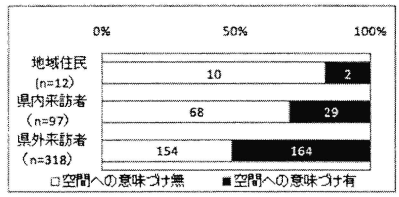

図2 居住地と意味づけ（人数）

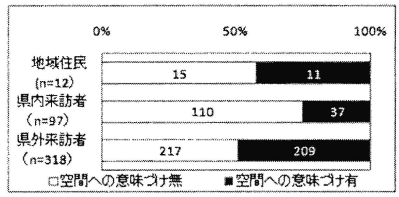

図3 居住地と意味づけ（記事数）

3. 捉えられた空間

3.1 全 体

松島湾がどこから捉えられたか（視点場）をみると，船上が最も多く，次いで展望地，不特定と続いており，観光用に整備された施設を利用して鑑賞されていることがうかがえる（図4）。どのように捉えたのか（景観種類）をみると，水平景が最も多く次いで俯瞰景となっている（図5）。視点場では船上が最も多かったことを考えると，展望地以外では水平景として捉えられる機会が多いといえる。また，シークエンス景は15件と非常に少なく，船上からでも水平景として捉えられているといえる。また，何を捉えたのか（視対象）をみると，島と全体（「松島」などと特定の要素を記述せずに表現しているもの）がほぼ同数で多く，次いで海，地形（湾や山）となっている（図6）。

また，視対象は複数の組み合わせから成立しているため，数量化3類およびクラスター分析（ウォード法）により視対象をタイプ分類した。数量化3類によって1軸から7軸まで抽出され（累積寄与率91.6%），軸は「全体性（個別の要素ではなく全体を指すかどうか）」「生業（遊覧船や養殖など営みと関係するかどうか）」「多島海（島・海と関係するかどうか）」「人為（舟や建物など人工物と関係するかどうか）」「海関連（海と関係するかどうか）」「恒常性（動きがあるなど変化があるかどうか）」「島付随（島に付随するものかどうか）」と解釈された（表1）。これによって得られた因子得点によって，10タイプに分類された。【全体】が

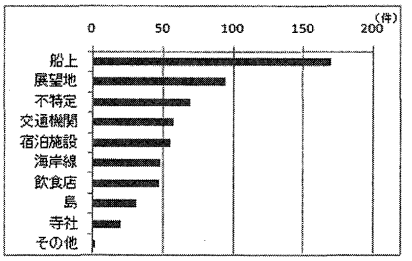

図４　視点場

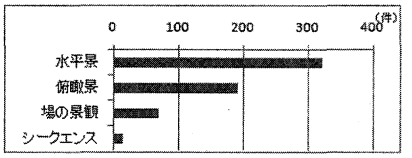

図５　景観種類

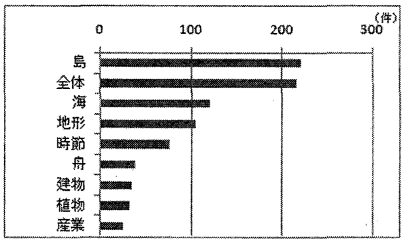

図６　視対象

表１　抽出された軸

	1軸	2軸	3軸	4軸	5軸	6軸	7軸
全　体	1.67	-0.30	-0.24	-0.17	-0.17	-0.18	0.00
島	-0.78	-0.74	-0.78	0.82	0.06	-0.25	-0.55
海	-0.63	1.69	-0.83	-0.90	-1.21	0.00	0.13
植　物	-0.61	-0.48	-0.81	0.52	1.16	0.44	4.68
時　節	0.29	1.73	1.43	2.02	0.57	0.94	-0.17
地　形	-0.64	-0.30	1.86	-0.61	-0.06	-1.70	0.20
建　物	-0.31	0.86	-0.70	-2.02	4.03	0.37	-1.23
産　業	-0.67	-1.46	0.80	-0.11	-1.38	2.61	-0.91
舟	-0.53	-1.26	1.33	-1.75	-0.28	2.75	0.24
寄与率（%）	21.29	14.16	13.28	11.83	10.59	10.41	10.03
軸　名	全体性	生　業	多島海	人　為	海関連	恒常性	島付随

注）▒は絶対値が0.8以上

最も多く，【島のみ】が次いで多い。【多島海】【時節と環境】【人の営み】【海のみ】が続いており（表2），松島は海というよりは島を中心に捉えられていることがここからもうかがえる。

3.2　空間の意味づけの有無による差異

1）視点場・景観種類・視対象

（1）視点場

来訪者の居住地ごとに，空間の意味づけの有無による捉えられた空間の差異をみる。ただし，空間の意味づけを行った地域住民は２名しかいないため，空間の意味づけの有無による差異に関しては，地域住民は県内来訪者に含めて差異をみた。

県内来訪者は展望地からの記述が最も多いのに対し，県外来訪者は船上からの記述が最も多い（表3）。また，県内来訪者は飲食店からの記述も多い。県外来訪者は視点場を特定しない記述が多く，次いで展望地，宿泊施設からの記述が多い。これらの結果は，そもそも県内来訪者と県外来訪者のどこを訪れるかといった観光の仕方の差異も反映されているといえる。県内来訪者はどの視点場においても空間の意味づけを行う記述は約３割と低く，展望地と飲食店ではとくにその割合は低くなっている。一方，県外来訪者は船上と展望地，交通機関では空間の意味づけを行った記述は行わない記述とほぼ同じかもしくは多いものの，宿泊施設

表２　視対象タイプ

タイプ名	記述内容	記事件数
全　体	「松島（特定の要素なし）」	180（30.1）
島のみ	島だけ	105（17.5）
多島海	島・海・地形	58（9.7）
時節と環境	夕陽などと自然物	52（8.7）
人の営み	養殖や船	48（8.0）
海のみ	海だけ	43（7.2）
建物と環境	建築物と自然物	34（5.7）
地　形	湾や山	32（5.3）
松と島	松と島	29（4.8）
時節のみ	夕陽や朝陽，月だけ	18（3.0）

注）（ ）は総記事件数に対する割合（単位：%）

表３　視点場

居住地	住　民		県　内		県　外	
空間への意味づけ	無	有	無	有	無	有
船　上	4（15.4）		12（8.2）	4（2.7）	76(17.8)	74(17.4)
展望地	5（19.2）	3（11.5）	32(21.8)	7（4.8）	23（5.4）	25（5.9）
不特定	1（3.8）	1（3.8）	10（6.8）	5（3.4）	21（4.9）	32（7.5）
交通機関		1（3.8）	11（7.5）	4（2.7）	17（4.0）	24（5.6）
宿泊施設	1（3.8）		9（6.1）	3（2.0）	32（7.5）	12（2.8）
海岸線	2（7.7）	1（3.8）	8（5.4）	4（2.7）	22（5.2）	12（2.8）
飲食店	2（7.7）		24(16.3)	3（2.0）	8（1.9）	11（2.6）
島		3（11.5）	1（0.7）	4（2.7）	11（2.6）	12（2.8）
寺　社		1（3.8）	3（2.0）	3（2.0）	7（1.6）	6（1.4）
その他		1（3.8）				1（0.2）

注）（ ）内は居住地ごとの記事数に対する割合（単位：%）

と海岸線においては空間の意味づけを行った記述が少なくなっている。県内県外来訪者と同様に空間の意味づけを行わずに眺めを体験する視点場があるといえる。

視点場を特定しない記述においては，空間の意味づけを行っている記述が空間の意味づけを行わない記述よりも多い。対象空間への親近性が弱いと，空間の意味づけを行うことで「どこから眺めたか」といった作成者と対象空間との位置関係を含めた実際の眺めではなく「『松島』を眺めた」といった作成者と対象空間の位置関係を意識しない像が想起されたと考えられる。また，空間の意味づけを行った県外来訪者は交通機関からの記述も多く，他の視点場よりも松島を眺める時間が短いことが考えられ，これも同様に「『松島』を眺めた」といった作成者と対象空間の位置関係を意識しない像が想起されたことが考えられる。

（2）景観種類

景観種類は視点場に対応した結果となっており，展望地からの記述が多い県内来訪者は俯瞰景で多く捉えているのに対し，船上からの記述が多い県外来訪者は圧倒的に水平景で捉えている（表4）。同一の視点場では県内県外来訪者ともに同じ景観種類で捉えている。水平景とシークエンス景観の2種類の捉え方が考えられる船上からは，来訪者は県内外関係なく水平景で多く記述している。船上からシークエンス景観を記述しているのは1件を除いてすべて県外来訪者であった。

（3）視対象

前述の通り，県内および県外来訪者は視点場が異なっており，視点場ごとに記述されている視対象タイプは異なる（表5）。船上と海岸線を除くどの視点場からも【全体】が最も多く記述されている。船上からは【島】が最も多く記述されており，島を間近で眺めたことによる影響がうかがえる。船上では，【全体】【多島海】【人の営み】がほぼ同数記述されている。展望地からは【全体】が圧倒的に多く，その他はすべてのタイプが一定数記述されている。交通機関と宿泊施設からは，【海のみ】が【島のみ】【多島海】よりも多く記述されている。

空間の意味づけの有無と視対象の関係をみる（表6）。空間の意味づけに関係なく【全体】が最も多いが，その割合は空間の意味づけを行っている記述の方が高い。また，視点場ごとに同様の関係をみると（表7），船上および不特定を除いたすべての視点場で空間の意

表4　視点場と景観種類

視点場	景観種類	県内		県外	
		無	有	無	有
船上	シークエンス	1（0.6）		9（2.1）	4（0.9）
	水平景	15（8.7）	4（2.3）	67（15.7）	70（16.4）
展望地	俯瞰景	37（21.4）	10（5.8）	23（5.4）	25（5.9）
不特定	場の景観	11（6.4）	6（3.5）	21（4.9）	32（7.5）
交通機関	水平景	11（6.4）	5（2.9）	17（4.0）	24（5.6）
	俯瞰景	1（0.6）			
宿泊施設	俯瞰景	9（5.2）	3（1.7）	32（7.5）	12（2.8）
海岸線	水平景	10（5.8）	5（2.9）	22（5.2）	12（2.8）
飲食店	水平景	4（2.3）		2（0.5）	6（1.4）
	俯瞰景	22（12.7）	3（1.7）	6（1.4）	5（1.2）
島	シークエンス			1（0.2）	
	水平景	1（0.6）	7（4.0）	10（2.3）	12（2.8）
寺社	水平景	3（1.7）	4（2.3）	5（1.2）	6（1.4）
	俯瞰景			2（0.5）	
その他	俯瞰景		1（0.6）		1（0.2）

注）（　）内は居住地別空間への意味づけ有無の記事数に対する割合（単位：%）

表5　視点場ごとの視対象タイプ

	船上	展望地	不特定	交通機関	宿泊施設	海岸線	飲食店	島	寺社	その他
全体	25（14.7）	35（36.8）	38（54.3）	21（36.2）	17（30.4）	9（18.4）	19（39.6）	8（25.8）	7（35.0）	1（50.0）
島のみ	75（44.1）	5（5.3）	7（10.0）	3（5.2）	3（5.4）	5（10.2）	1（2.1）	4（12.9）	2（10.0）	
多島海	23（13.5）	12（12.6）	4（5.7）	4（6.9）	3（5.4）	7（14.3）		5（16.1）		
時節と環境	6（3.5）	8（8.4）	5（7.1）	7（12.1）	12（21.4）	10（20.4）	2（4.2）	1（3.2）	1（5.0）	
人の営み	21（12.4）	6（6.3）		4（6.9）		6（12.2）	3（6.3）	4（12.9）	3（15.0）	1（50.0）
海のみ	1（0.6）	5（5.3）	4（5.7）	11（19.0）	10（17.9）	3（6.1）	6（12.5）	1（3.2）	2（10.0）	
建物と環境	9（5.3）	9（9.5）	2（2.9）	4（6.9）	2（3.6）	3（6.1）	3（6.3）		2（10.0）	
地形	2（1.2）	6（6.3）	2（2.9）	1（1.7）	4（7.1）	1（2.0）	12（25.0）	2（6.5）	2（10.0）	
松と島	7（4.1）	5（5.3）	4（5.7）	3（5.2）	1（1.8）	2（4.1）	2（4.2）	5（16.1）		
時節のみ	1（0.6）	4（4.2）	4（5.7）		4（7.1）	3（6.1）		1（3.2）	1（5.0）	

注）（　）内は視点場別記事数に対する割合（単位：%）

味づけを行っている記述では，【全体】が記述されている。船上からは空間の意味づけが行われていても【島のみ】が最も多い。また，【多島海】【人の営み】も多く記述されており，至近で体験された眺めが捉え方に影響を与えていると考えられる。また，視点場が特定できない記事では，【島のみ】も記述されている。これらは，「松島は多くの島々がある」といった島が多いことを具体的に記述したものであった。

表6　空間への意味づけと視対象タイプ

	無	有
全　体	87 (25.4)	93 (36.2)
島のみ	60 (17.5)	45 (17.5)
多島海	33 (9.6)	25 (9.7)
時節と環境	36 (10.5)	16 (6.2)
人の営み	27 (7.9)	21 (8.2)
海のみ	31 (9.1)	12 (4.7)
建物と環境	18 (5.3)	16 (6.2)
地　形	23 (6.7)	9 (3.5)
松と島	14 (4.1)	15 (5.8)
時節のみ	13 (3.8)	5 (1.9)

注）（　）内は空間への意味づけの有無別記事数に対する割合（単位：%）

表7　空間の意味づけの有無と捉え方

視点場	景観種類	視対象	無	有
船　上	シークエンス	島のみ	5 (1.5)	
	水平景	全　体	10 (2.9)	15 (5.8)
		島のみ	39 (11.4)	28 (10.9)
		多島海	10 (2.9)	11 (4.3)
		人の営み	12 (3.5)	8 (3.1)
展望地	俯瞰景	全　体	18 (5.3)	17 (6.6)
		多島海	9 (2.6)	
		時節と環境	5 (1.5)	
		建物と環境	6 (1.8)	
		地　形	6 (1.8)	
不特定	場の景観	全　体	18 (5.3)	20 (7.8)
		島のみ		5 (1.9)
交通機関	水平景	全　体	8 (2.3)	13 (5.1)
		海のみ	8 (2.3)	
宿泊施設	俯瞰景	全　体	13 (3.8)	
		時節と環境	9 (2.6)	
		海のみ	7 (2.0)	
海岸線	水平景	全　体	5 (1.5)	
		多島海	7 (2.0)	
		時節と環境	8 (2.3)	
飲食店	俯瞰景	全　体	10 (2.9)	6 (2.3)
		地　形	8 (2.3)	
島	水平景	全　体		6 (2.3)

注）（　）内は空間への意味づけの有無別記事数に対する割合（単位：%）
5件以上を記載

2）空間の捉え方

県内県外来訪者は観光の仕方が異なることが考えられ，それによって視点場および景観種類が異なっている。船上から眺めることが多い県外来訪者は，島・海・養殖（人の営み）・松の奥行感のある眺めを体験し，展望地から俯瞰して眺める県内来訪者は，海・島・地形・松などの要素の奥行感のない眺めを体験しているといえる。空間の意味づけを行った来訪者は県内県外ともに個別の要素ではなく松島全体を捉えている。しかし，船上からだけは空間の意味づけが行っていても，空間の意味づけを行っていない場合と同様に，松島全体より島が多く捉えられ，多島海や人の営みなども松島全体とほぼ同数捉えられている。

おわりに

現在，松島は県内来訪者と県外来訪者の観光の仕方がそれぞれ展望地中心と船上中心とで異なっており，それが空間の捉え方の違いに結びついているといえる。また，県外来訪者のおよそ半数，県内来訪者の3割弱は松島を「日本三景」や「松尾芭蕉が句を詠んだ場所」として個別の要素に関係なく「松島」という記号的な空間の意味づけを行なっており，松島に付随する意味（情報）は，空間を捉える際の無視できない一つの要素とみることができる。

現在の松島における空間の意味づけを行うと，来訪者は，個別具体の要素およびその集合体としての実空間ではなく「松島」全体を捉える傾向にあるといえる。来訪者の居住地が近くなるほど空間の意味づけの記述が少なくなっていることを考えると，松島への親近性が強まるほど，（とくに松島においては紋切り型の）空間の意味づけから解放され，利用者自身の感性をもって捉えているといえる。

宿泊施設や飲食店からは空間の意味づけを記述している利用者が少なくなることは，観賞以外の何らかの活動を行っている時には，空間の意味づけはなされずに実空間が捉えられていることがわかる。

また，空間の意味づけを記述している県外来訪者でさえも，船上からは島のみが最も多く記述されていることから，近景における視覚的刺激は空間の意味づけ

よりも捉え方においては優先されるといえよう。

今後の自然風景地を整備・管理していくに当たっては，古来より広く知られている名勝地であっても，そこに施される空間の意味づけによって個別の要素を鑑賞しなくなることも考えられる。たとえば本研究の松島でみたように，実際の空間および島と海，産業等各要素に関連する情報を提供することで，来訪者は新たな空間の意味づけを行うと考えられる。松島においては，県内来訪者と県外来訪者の観光の仕方が異なるため，「はじめに」で示したように，対象空間に対する親近性の程度による風景体験の差異を埋めるためにも，親近性の程度によって利用頻度が異なった視点場ごとに，それぞれ対象空間の理解を深め，景観の価値を高めるような異なる情報を提供することも必要であろう。たとえば親近性が比較的低い県外来訪者は船上から眺めることが多い。船上からは，島のみを捉える傾向が強いため，実際に島と同時に視界に入っていると思われる山や海に関して，山に囲まれていることと海と島の存在によってかつて松島が霊場に見立てられたことなどの情報を示し，個々の要素の関係を示すことが考えられる。さらに，展望地から俯瞰する多島海景観が，かつては国立公園行政において評価されていたことなどの情報も船上で示すことで観光の仕方を誘導し，展望地を多く訪れる親近性の高い県内来訪者と同じような県外来訪者の新たな観光体験および風景体験に結びつくことも考えられる。

また，親近性が比較的高い県内来訪者は展望地から眺めることが多く，空間の意味づけがあまり行われていない。展望地からは，松島全体を捉える傾向があるため，そこからの眺めが国立公園指定における多島海景観の規範になったことなど対象空間に関する過去の評価を示し，改めて多島海と展望地となる山があるという地形との関係を理解させ，その景観の価値向上を図ることなどが考えられる。

本研究でみたように，従来はアンケートでしか知り得なかった利用者の意識が，情報通信の進歩によってブログやツイッターなどを通して把握できるが，今回の情報源としたブログは，作成者の率直な意見を得ることができる反面，その作成者の属性が利用者全体とどのような関係にあるかは不明であり，一般的な現地でのアンケートなどとの併用により，データの精度は向上していくものと考えられる。また，本研究では居住地によって対象空間への親近性としてきたが，来訪頻度などは把握できておらず，この点も他の手法との併用で補足すべき点といえる。こうして，従来の手法に加えて今後の地域管理における意向把握などでも有効に利用できるものと思われ，今後の活用が期待できる。

参考文献

堀　繁（1988）「聖」と「清」による森林風景の意味的分類．造園雑誌 51（5），281～286.

伊藤　弘（2005）新宿御苑における好まれる景観と印象に残るものの関係．ランドスケープ研究 68（5），463～466.

伊藤　弘（2011）近代の松島における風景地の整備と眺めの関係．ランドスケープ研究 74（5），769～772.

伊藤いずみ・曽和治好（2010）ブログからみる日本庭園の評価．ランドスケープ研究 73（5），377～380.

黒田乃生・羽生冬佳・下村彰男（2002）写真撮影調査による観光客と住民の景観認識の差異－白川村荻町を事例に．平成 14 年度都市計画論文集，961～966.

三浦麻子・山下清美（2004）人はなぜウェブ日記・ウェブログを書き続けるのか（1）．日本社会心理学会第 45 回大会論文集，676～677.

中村良夫（1982）風景学入門．中央公論新社，東京，244pp.

西田正憲（1999）瀬戸内海の発見―意味の風景から視覚の風景へ．中央公論新社，東京，263pp.

篠原　修（1982）土木学会編新体系土木工学 59 土木景観計画．技報堂出版，東京，326pp.

田中正大（1981）日本の自然公園　自然保護と風景保護．相模書房，東京，284pp.

山本泰裕・伊藤　弘・小野良平・下村彰男（2006）GPS を用いた新宿御苑における利用者の行動パターンに関する研究．ランドスケープ研究 69（5），601～604.

（2012 年 1 月 23 日受付，2013 年 2 月 4 日受理）

Abstract : Natural scenic area in coastal area has been known as scenic spot from ancient times. It can be said that visitors see scenic spots with specific meaning. Matsushima in Miyagi Prefecture is known as the scenic spot since ancient times. It is profitable in the landscape plan to know the relationship between meaning and landscape. This study aims to clarify the appreciated landscape by analysis of blog and discuss the relationship between meaning and landscape in Matsushima. As a result, it can be said that the way of seeing of visitors who is closeness to Matsushima is free from the meaning and about a half of visitors not closeness to Matsushima see it with meaning. The present meaning about Matsushima lets visitors see "whole" of Matsushima (not specified element).

Key words : scenic spot, meaning, blog, landscape